離譚 (新潮連載 昭和五十三年二月号から

第二十二~二十三回 二十七回~三十回)

今回は前回、 第二十二、二十三回から始め、 飛ばした権馬関連の話題を新潮 単行本の下巻に 連

新潮第二十二回の出だしに

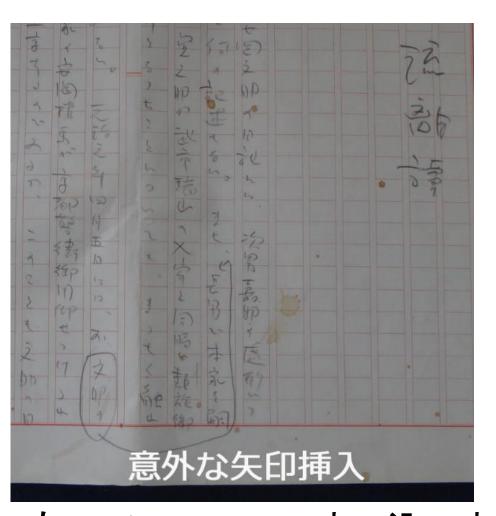
入ります。

載

の記述もない。 安岡文助の日記には、 また文助の長男で本家を嗣いだ・・ 次男嘉助の処刑について何

とあります。この部分の原稿を見ると、

を挿入訂正していますが、何故か少し離れた文の途 「文助の長男で本家を嗣いだ」の箇所の「文助の」



込み矢印で挿入してい中に「文助の」を書き

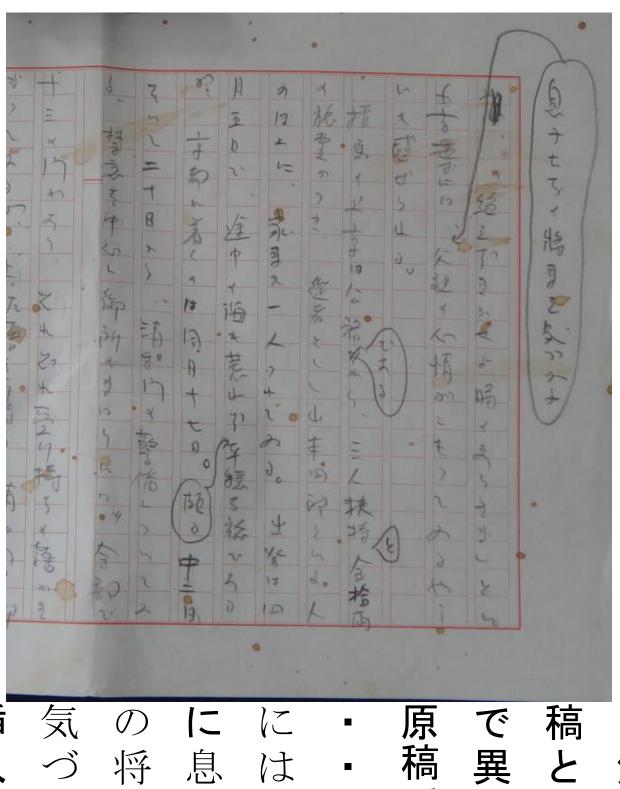
ます。

への送別の歌「わかれまた、その後の権馬

ても海山遠くへだつと

も絶えずきかせよ時の

ありさま」の歌に対す



息

子

た

5

は

の

後

る言

葉

将

来

ま

で

挿入され て

カン

5

が

稿 原稿では で 異なる لح 単 行 0 本

る

解

釈

が

原

いますが、単行本ではそれも消去して、

老 いとともに孤独になって行く父親の心情がこもつ

てゐるやうにも・・・

変えている。その理由は何か。

権馬の日記の「五月廿七日 雨 昼より東山霊山

東山霊山で天誅組の死者の祭礼をおこなつたといふ ス。・・」について 行キ大和行諸士祭礼。 右ニ依リ書有志面会

 \mathcal{O} は、 たとひどんなに簡略な祭礼であらうと、よく

そんなことが出来らものと驚かされる。

覺馬) 子ノ正月吉日に山北で嘉助の法要を行なった とありますが、文久四年萬日記帳安岡嘉一郎(安岡

記録があります。 た 十六日に嘉助の刑が執行され、権馬が京都に出発し 四月八日以降とすると四十九日の法要と考えられ 法要の日付はありませんが、二月

ます。 ますので、 現在の高知市内から久万、公文の参列者もい 当事者の実家がある山北近辺ではそれほ

流離譚では京都に軍勢が集った状況での権馬の行

ど厳しい監視はなかったのでしょう。

動を次のように書いています。

とんど汲み取れない。・・諸家の建白を国許へ発送 しかし、 かういふ緊張した空気は権馬の日記からほ

前に退屈なおもひで茫然と立ちつくしてゐたのであ したといふこと、・・・当番のときには御所の

有志建白魚住より差出、 諸家の建白を送ったとあります。この建白は肥後 西郷建白など十数通ありま

す。 い入れがあったようです。 军 線付きの和紙」に書かれています。 書かれていた用紙は「白紙」でなく、 建白等は誰かの写しを借 残す強い 特注か

用し、 なおもひで」過ごしていたのではなく、 書き写し、 返却する作業を考えると、「退屈 政情を考え

ていたと思います。 西郷建白」、「肥後有志建白魚住より差出」の写

しを次に示します。

きさりるりろうり物出了松出了 がそんりかがりいるよ 医与粉发/好學作成了至八月吗! 除アハーン 死機久。不会 一致 是我权人教你写作 上下官員可帰為點涉心精選又心官負成火流人 官到布置之次才當分一通"产公力人、一人以取格之方 皇国之国体以是一目的八此一届一十本朝中古 以上之体了本"唐、西土西洋各国近番户野的三定不 キラ減シ馬衛ラ貴フ 校之大体ラ和スへと 四個建白 国的

だつとあるうで~~國家急迎了人作有榜数作儀然以车 後,我多激之的共国家之大事を多議、松之及中で限海い事 多ではいってる死死をあるしたくことと 旅多中年三月伊军内高平流川八万 B 教等中山大纳来数内田中 大成完了好致中出一起八癸五甲富以来营布有一满有司苟巧姑息之 情知是人心奉意好 的内之外一事看中将忠爱朝臣之名起之奉——老的专处书条权村 被為心 找你之天下海大治军之歌是了有多落 皇國方法明明傲慢多枪既及侵在了势弱的的的心心的心深人 門後有志建白魚佐が差出 一般意家が安しよらる的上被也 一代教行代 勅後國家のこ大羊我を失いた付夷我 属華ななるは

そして、

数、 権 馬の日記に「「七月廿五日清和院御免。 残ラズ下坂」とあるのは、この日限りで土佐 警衛

カ。 づけて、「僕、 藩は京都警衛の任を解かれたといふことなのだらう ・いささか腑に落ちない気もする。 日延ベヲ以テ居残ルベシ」としるし 権馬はつ

り、 成功であつたわけだ。 てゐるのだが、 大坂へ向つてゐるのだから、 翌廿六日の正午には高瀬川を舟で下 いつたい権馬は何をもくろん 京都居残り策は不

で京都に居残らうとしたのか、それはまつたくわか

らない。

と流離譚に書いていますが、覚馬への手紙の一

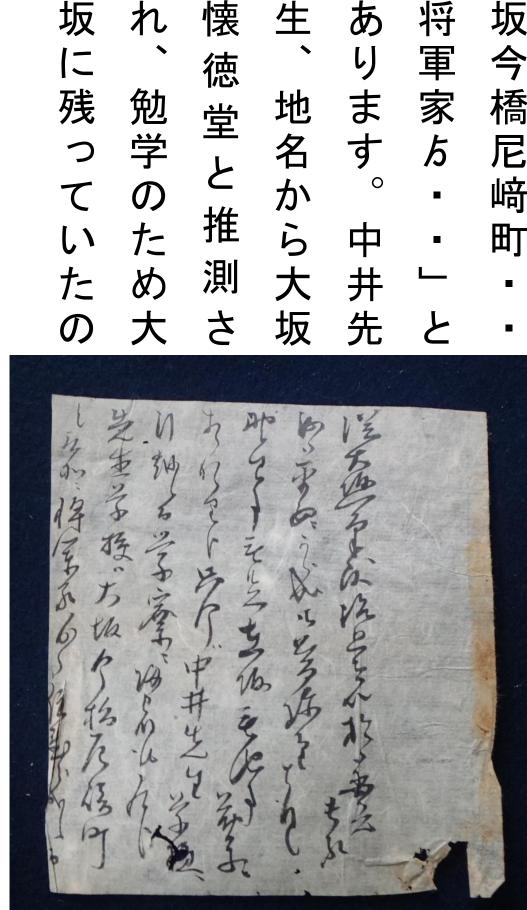
(推測)があり「・・只今中井先生・・学寮・

将軍家ゟ・ 坂今橋尼﨑町・ ط

あります。 中井先

生、 地名から大坂

懐 徳堂と推測さ 勉学のため大



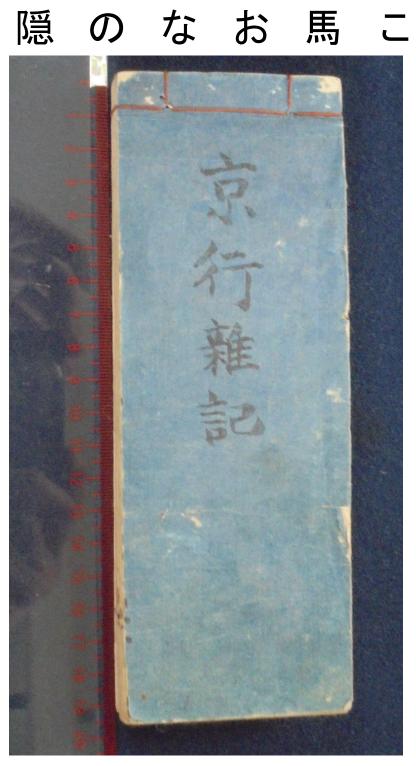
です。 勉学後、 記録帖(正徳)に記載されています

が十一月十六日帰高したのです。

流離譚で参考された権馬の日記は「道中日記」で

すが、これ以外に権馬の日記に「京行雑記」があり

れ ま す は 権 0 馬



上

で

の

家

米

蔵

1=

お

往 復 が تع 者として行きます。 ると権馬は再度京都へ、福岡孝弟・小笠原唯八の すように置かれていたようです。それで章太郎の手 人との会談などの政事活動、上方から高知へ汽船で 加えられることはありませんでした。この日記に に渡ったのが遅く、この日記の情報が流離譚に書き 容堂の気に障り、 の記録が残されている。 (上方へ戻りの汽船に容堂同乗しています) 京行雑記には中岡慎太郎など 権馬も小笠原とともに早追で京 何故か小笠原の政事活 従

都を追い出されます。

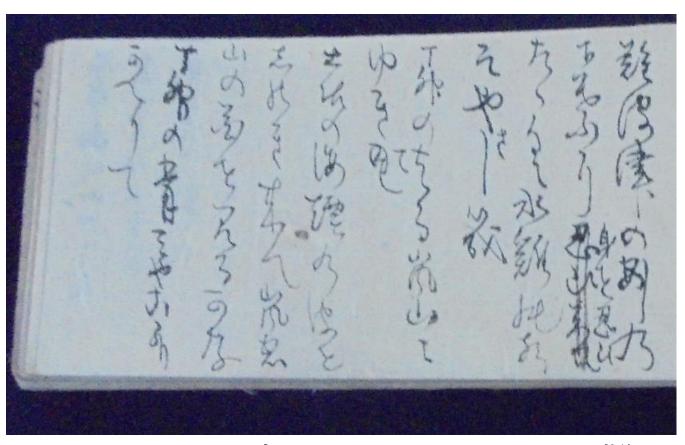
京都発五月十三日高智(知)

分の時間で高知に戻っています。 着十九日で高知着、 往きは十三日要していたが、 京行雑記にこの早

す。 早追部分を坂崎紫蘭が小笠原唯八傳に引用していま 追の時の記録も残されています。 隠すように置かれていた資料をどのように見た 権馬の京都の生活

のか謎です。

紫蘭が引用した京行雑記の一部を次に示します。



権馬の話は終り新潮第二十七回の出だしは

ある。 安岡覚之助に、「獄中作養気歌」というふ漢詩が これは文天祥の「正気歌」になぞられた・

と覚之助ことを書いています。単行本では後半の

「これは文天祥の「正気歌」になぞられへたもので

あろうが、」が削除されている。この覚之助の漢詩 に「高吟ス、文山正気ノ歌」とあり、吟詠し気を張

っていたのだろう。

へと向かう宋の臣下として戦い、 この文山とは『文 天祥(ぶん てんしょう)滅亡 宋が滅びた後は元

が に捕らえられ何度も元に仕えるようにと勧誘された 忠節を守るために断って刑死した。 張世傑や陸秀

らえられても屈せずの人として正気の歌は勤王志士 夫と共に南宋の三忠臣(亡宋の三傑)の一人。』捕

で愛唱された。インタネット検索)



文山の拓本を恒之

進が購入してきた

の拓本と同じ箱に残「嗚呼忠臣楠子之墓」

されていたと以前に

も紹介しました。裏に「文山 晦翁」と書かれてい

る。 拓本の石碑は不明です。文山の名は覚之助から

半平太之爲人兼て承知候ハ能得共此程之好男子とハ

嘉助への手紙にも

しもよらず此度之義憤古之文山先生ニも恥ちざる

のいき込をミぞ此上ハ務メて士心を鼓舞致し壱人ニ テも同志之・

文山思想への覚之助・嘉助の思い入れ考えると覚

之助の嘉助への天誅組の参加への見合わせ説得が空

しいように思う。

新潮第三十回の出だしは覚之助の放免

野 村 慶応三年九月六日以降、 万寿弥など六人の同志たちと相前後して、 安岡覚之助は島村寿之助

町 とあります。 \mathcal{O} 獄舎から放免され 覚之助は山北に戻ったのでしょうか。 た。

親 Щ 類預かりの時は文助日記などから、妻万喜の居る 北で暮らし四男が誕生したと考えました。 いつご

町 ろ となっていますので、 か不明ですが、覚之助の戸籍は現在の高知市唐人 放免後唐人町に万喜と生

ていたのでしょう。 実父文助も山北から来て、

あ 助 りません。 の話を聞いたのでしょうが、 四ヶ月休んで一月に戊辰戦争の迅衝 日記などには記載が 隊

加わり、 大垣から出した手紙が流離譚にあります。

ここに、 二月二十日づけで覚之助の手紙がある。

濃 州大垣より、 筆指し出し

覚之助 恐 々謹言

日夜

人様

膝 下 郎

白 権 馬は次第二快く相成り候事と察し奉

り

候。 平太郎事、 成る丈ケ文武相励ミ申すべく候

手紙の最後に文助、 平太郎、 権馬が連記され三人

が 近くに住んでいたようです。

この手紙に続いて

お 上家の 権馬が当時、 病床にあっ たこと

ŧ

病 元治元年の京都警衛のときの日記でも、しばしば して勤務を交代して貰つたりしてゐたことや、 権馬の病気は何であつたかわからない

らつてゐたものかと思はれる。 た後に死亡したときの病状から考へて、 権馬は、二月二十五 結核をわず

日づけで 「軍用寸志」として金三両を目附あてに差

し 出 発奮したせゐでもあろうか。 してゐるが、 、それはこの覚之助の手紙を読んで

その後にも

は 以後ずつと寝たり起きたりの状態であつたやうに思 れ る。 の変のとき京都警衛に出てゐて発病し、 もし体さへ健康なら権馬は、 真ッ先に飛

とあります。 の場面を書いた頃、 権馬は患って寝ていたのだろうか。 京行雑記が章太郎の手元になく、

出してこの戊辰役に従軍したはずである。

権馬が京都に行ったことは知りません。それでこの ように書いたのでしょうか。 早追の疲れはあっ たか

も知れませんが、 病床ではなく、 何か考えがあって、

戊辰戦争に参戦しなかったと思います。 流 離譚の話からから少し外れます。

明治元年八月に覚之助は戦死します。 覚之助戦死

لح ます。 同 じ頃、 権馬、 小軍監として活躍し戦死した秋沢清吉が 小笠原と一緒に早追で高知に戻っ

死の三年後明治四年年に文輔 の ŧ 秋沢ですが、その名は源九郎でした。 (墓立の時期に改名) 覚 之助

孫の馬子、妻の墓を作りは息子の覚之助、嘉助、

が傾いていたので直しまます。最近、覚之助の墓

墓石異常こ重いとのことしたが、業者が言うには

子になっていますので墓です。覚之助は本家の養

きですが

文

輔

が

建立は長男

平

太郎



無住となります。 と考えます。 お西は大川筋に移り山北のお西の家は 権馬の長男太郎兵衛の墓 (墓 石

明

治元年辰七月

明治元年は九月から)が、

お上

の

す。 富家墓地でなく、 権 馬も混乱していたのでしょうか。 お下の四坊山墓地に作られてい 明治九 年

太郎に娘美名吉が誕生、 を離れ廿代に住居、 平太郎は明治十五年に逝 時期は不明ですが二人は山

娘美名吉が本家の主となり先祖祭も美名吉が出席し 治二十四年福島へ転住し本家も無住となります。 、ます。 万 喜、 真寿、美名吉は唐人町、 大川 筋、

明

*本題から逸れて

んでいます。この党が付けた集団名について公文豪 武 市半平太の作った一派を流離譚では勤王党と呼

さんが、 別の記事で問題提起しています。

絶対に許されなかった。「土佐勤王党」なるものが 『藩政時代、 武士といえども「党」 を結ぶことは、

うになったのは、大正元年出版の瑞山会編「維新土 さも実在したかの如くオンパレードで記述されるよ

佐勤王史」からである。』

流離譚は維新土佐勤王史に従ったのでしょう。